研　究　報　告

小規模博物館の常設展示リニューアルに携わって

＊ 富田　三紗子

はじめに

筆者は現在、大磯町郷土資料館に歴史担当の学芸員として勤務している。大磯町郷土資料館（以下、必要に応じて当館又は郷土資料館と表記する。）は、大磯町立の登録博物館であり、考古、歴史、民俗、自然等の資料を収集、保管、展示、調査研究を行う、いわゆる地域博物館である。昭和63（1988）年10月25日に県立大磯城山公園内に開館してから28年が経過した昨年平成28（2016）年11月3日、常設展示をリニューアルし新たに開館した。財政難を理由として常設展示のリニューアルがなかなか進まない地方自治体立の博物館施設が多い中、常勤学芸員3人（平成25年度、実施設計策定前時点）、予算規模約4,500万円、運営母体となる町自体も予算規模約90億円という小規模な組織においてリニューアルを実現できたことは、稀有な事例と言えるだろう。

もちろん、当館のリニューアル事業は、決して順風満帆の中進められたものではない。種々の要因が絡み合い、紆余曲折を経て実現し、その経緯と実施内容には多くの課題が見られる。本稿では、小規模博物館のリニューアル事業の事例として、当館のリニューアル事業の経緯、内容、効果と課題をまとめる。なお、筆者が歴史担当の学芸員として当事業に関与したため、報告の中心は歴史分野に依るものとなる。また、筆者自身、在職4年目にして当事業に携わった都合上、一職員としての視点からしかまとめることができない。そして、本稿の見解は全て筆者個人の見解によるものであり、当館の組織的な見解を示すものではない。

1.　経緯

当館においては、一度、常設展示のリニューアルについて、開館10年後にあたる平成10年度に大幅な展示替工事を実施することが検討された。この事業は、町の総合計画に明記された事業であり、平成7年度予算に基本構想策定委託事業が組まれた。平成8年度に基本構想及び基本設計、平成9年度に実施設計、平成10年度に実施工事で進める計画であったが、執行途中に財政事情の理由から事業が中止となった。

その後、平成18年度、平成20年度と常設展示室において部分的な展示替えを行ったが、大型展示資料の更新を行わなかったため、来館者には展示替えの印象がうまく伝わらなかった。平成20年度には、教育委員会各部等重点目標として「郷土資料館リニューアルオープンの策定」が掲げられ、郷土資料館の活動における課題の抽出と、リニューアルに向けた指針をまとめた報告書が作成された。この報告書を基底として、平成22年度に「展示リニューアル基本構想報告書」及び「基本設計報告書」を作成したが、平成23年度に実施設計へ進むというところで、諸事情により実施設計委託を予算化することができなかった。

筆者はこのタイミングで現職に着任した。採用面接時に展示リニューアルに向けて事業が進められていることを聞かされたが、任用された段階では予算化されなかったことを聞かされ、凍結されてしまった基本設計報告書を受け取った。その後、この報告書を顧みることは、残念ながら業務の中ではあまりなかった。筆者としても今後の町の財政事情を鑑みれば、事業の継続自体が難しいことは容易に想像できた。また、新人学芸員として職務にあたる中、日々、目の前の様々な仕事をこなすことで精一杯であり、常設展示のリニューアルを検討するまでには至らなかったこともある。当館の常設展示室は、特別な展示具を使っているものもあったが、基本的にリニューアル前から展示替えを比較的容易に行うことができるような作りになっており、着任後、しばしば部分的に展示替えを行った。開館以来、初めての歴史担当学芸員として採用された筆者にとっては、大規模な展示リニューアルよりも、むしろ収蔵庫内に膨大に収納された歴史資料の整理を行うことの方が重要なのではないかと考え、企画展にも十分な予算がない中、なるべく館蔵資料を公開すべきと、資料整理の成果を展示や教育普及事業につなげる企画に重点を置いていた。

とは言え、開館から20年が経過した当時、常設展示の内容を更新する必要があったことも事実である。当館としては、平成24年度以降も実施設計委託の予算要求を継続し、私的にでも他の博物館施設の常設展示を見学すれば、その内容や良い点などを報告し、館職員内で情報を共有していた。また、平成25年度には、基本設計を凍結させたままにしてはいけないという考えから、館内検討会議として、基本設計の内容確認から始めて、具体的に展示内容を検討し始めた。

状況が大きく変わった背景には、具体的に旧吉田茂邸再建事業が動き出したことにある。旧吉田茂邸は、神奈川県や大磯町が建物の保存と活用を検討している最中、平成21年3月22日に原因不明の火災によって焼失した。町では同年7月に再建に向けた募金活動を開始し、全国から寄附をいただいてはいたが、再建に必要な金額を集めるまでには至っていなかった。平成23年7月、当時の財団法人吉田茂国際基金が解散するにあたって、当法人から残余財産が寄附され、ようやく旧吉田茂邸再建の目途がたった。旧吉田茂邸は、郷土資料館が立地する県立大磯城山公園と国道一号線を挟んで反対側にあり、公園を拡大するかたちで整備が進められていた。再建し、一般公開する際には、郷土資料館の別館として一体運営することが見込まれていた。

（＊　当館学芸員）

来館者の増加が見込まれるこの事業に応じるかたちで、郷土資料館のリニューアルを進めることが検討され、平成26年度に町の総合計画の実施計画の重点プロジェクトとして、地域資源を活かした観光推進プロジェクトの新規事業となった。その具体的な内容は、平成26年度にリニューアル実施設計、監理委託、資料整備委託、資料整理を行い、平成27年度にリニューアル実施工事、監理委託を行うというものであり、1億382万5,000円が事業費として見込まれた。

平成26年度から具体的に予算化されたことにより、実施設計の委託業者と具体的な打ち合わせを行うことができるようになった。前年度から検討会議を行ってはいたが、基本設計を策定してから実に3年が経過しており、その間に職員も変わり、町の状況も変化していた。具体的な内容は後述するが、基本設計で一度事業が凍結すると、実施設計を策定する段階で検討すべきことが増え、結果として無駄が多かったように感じている。事業の見直しによる途中での中止は、デメリットの方が多いのではないか。

当館のリニューアル事業は、このように二度の中止を経て成し遂げられた。実現には、当時の社会情勢に依るところが大きく、決して現場からコントロールできるものではなかった。リニューアル事業を大々的に行うのであれば、当然、莫大な費用がかかることは覚悟し、いかに時流にのせて予算を獲得するのかが肝要になる。

2.　内容

ようやく実施することができた今回のリニューアルでは、約半年間を臨時休館として、常設展示室のみならず、エントランスホール、展示ホール、廻廊、中庭、トイレの改修も行った。当館の展示リニューアルについては、単なる展示資料の更新だけでなく、施設を幅広く活用できるように改修することも視野に含めていた。そのため、中庭の改修を行い、休憩スペースとして整備することによって、来館者から多くの要望があった食事場所の確保に努めた。また、エントランスホールを常設展示の導入部分と捉え、展示ホールから常設展示室へ、さらに常設展示のエピローグとして廻廊を整備した。廻廊は、貸出ギャラリーとしての機能も兼ねている（図1）。

常設展示の展示テーマをリニューアル前後で比較すると、次の表1の通りである。リニューアル後の展示テーマは、当館が扱う四つの学問分野を明確に分けたかたちで、大項目を設定した。それぞれに、大磯の特性を表す主題を設け、さらに中項目を設定することに

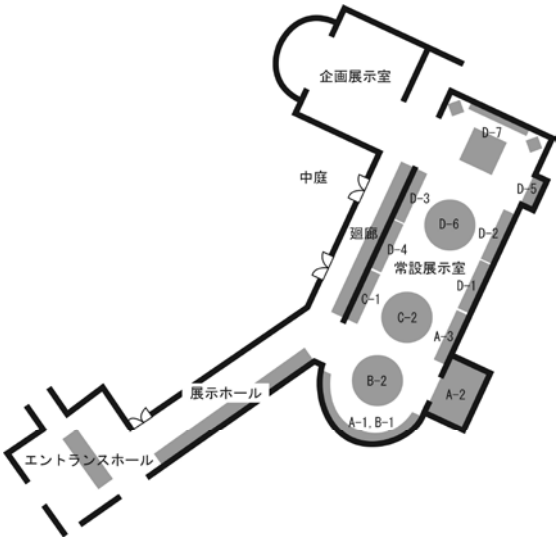

図1　大磯町郷土資料館配置図

表1　大磯町郷土資料館常設展示テーマ

リニューアル前	
エントランスホール	第2のふるさとを求めて
展示ホール	詩歌・文学にみる大磯の景観
Ⅰ　生活の芽生えと定住文化	竪穴住居
	縄文土器
	弥生土器
	土師器
	須恵器
	横穴墓
Ⅱ　文化の交流と道の変遷	相模国府
	街道と宿場
	海水浴場と別荘
Ⅲ　伝承・民話のこころ	民話のオブジェ
Ⅳ　豊かな風土と自然	大磯町の野鳥
	丘陵の恵み　黒潮の恵み
	豊作・豊漁への願い
Ⅴ　歴史が語る品々	テーマ展示
Ⅵ　海洋文化と民俗	祭り船
	禱龍館繁栄の図
廻廊	大磯の先駆者たち

リニューアル後	
エントランスホール	城山荘保存部材の展示
展示ホール	プロローグ：大磯の風土とかたち
A：いにしえの暮らし	A-1：器の変遷
	A-2：横穴墓
	A-3：相模の国府
B：自然のいとなみ	B-1：大磯丘陵の動植物
	B-2：大磯海岸の生物
C：祭りがつなぐ心	C-1：祈りのかたち
	C-2：海に願う祭り・大地に託す祭り
D：憧憬の地	D-1：大磯の寺と神社
	D-2：東海道大磯宿
	D-3：大磯海水浴場
	D-4：文学と大磯
	D-5：近代の象徴・煉瓦
	D-6：ゆかりのある人々
	D-7：別荘文化
廻廊	エピローグ：湘南の丘陵と海を訪ねて

より、より展示内容が明確になったと思う。

エントランスホールでは、当館の外観のモチーフともなり、設置場所の象徴とも言える三井家の別邸城山荘で実際に使われていた部材を再現展示した。この部材は、今回の展示リニューアルに伴い調査を進めた結果、城山荘の解体に関わった京都の工務店に保存されていることがわかり、交渉の上、部材をご寄贈いただき、展示させていただくことになった。来館してすぐに城山荘の展示が目に入ることから、立地場所の来歴を来館者に深く印象付けることができているだろう。リニューアル前は城山荘の軸組模型を展示していたが、展示の印象も大きく変えることができた（写真1）。

続く展示ホールでは、大磯の景観を詠んだ詩歌のレリーフと縄文土器を敢えて同じ場所に展示している。詩歌のレリーフは、リニューアル前から設置していたものである。展示ホールの壁面を大規模に改修することは、費用面から不可能であり、そのまま展示することになったが、そのままであればリニューアルした印象がなくなる。そこで、縄文土器の文様が自然の景観を活かして考案されたことを意識して、「風土」という括りで同時に紹介することにした（写真2）。

以下、常設展示内を分野ごとに紹介する。考古分野にあたる「いにしえの暮らし」は、時代ごとに考古分野のトピックとなるテーマで資料を展示している。まず、展示ホールから続いて、「器の変遷」として時代順に器を展示している。時代順に展示することによって、縄文土器と須恵器が町内で多く出土してきたことがよくわかり、地域の特色を示していると言えるだろう。

考古分野のトピックとしては横穴墓と相模国府は外せない。横穴墓はリニューアル前と変わらず復元模型で紹介しているが、今回のリニューアルではより再現性を高めるために、礫床の礫を実際の横穴墓で用いられていた礫に入れ替えた。また、復元模型の手前に横穴墓の副葬品と考えられる須恵器の大甕を展示している。この資料は、今回のリニューアル事業において、完形復元修復を施した。相模国府についても、新たな

写真1　リニューアル後のエントランスホール

見解を踏まえた解説パネルを設置し、リニューアル前とは内容を改めた。テーマ設定に大きな変更はないとは言え、随所に研究成果を反映させた展示となっている。なお、考古分野で大きく変化した点は、竪穴住居の復元模型を撤去したことにある。大きい造作物がなくなったことによって、展示の雰囲気は大きく変わっただろう。

自然分野は、考古分野に隣接するかたちで配置した。大磯の地形的特性から、丘陵部と海の二つに大きく分けて、生物標本を展示している。地域で見られる動植物が一目でわかる展示になっている。また、貝と海藻の標本をタイドプールと岩礁をイメージした特設の展示台に設置し、鳥類の標本も町内でよく見られるタブノキを樹形オブジェとして動的に配置するなど（写真3）、展示形態を工夫した。特にタイドプールの展示台は、海の深さを表した写真を背景として下から照明を当てており、見た目の美しさが来館者から好評である

写真2　展示ホールの展示

写真3　樹形オブジェと鳥類標本の展示

（写真 4）。

民俗分野では、町内に指定文化財となっている祭礼が多いことから、「祈り」を一つのテーマとして取り上げている。指定文化財となっている祭礼と対比させ、町内の地形的特性ともなっている丘陵部と海沿いに暮らした人々の信仰として、農業と漁業に関する神に関する資料を紹介している。具体的には、町内に見られる神棚、エビス・ダイコクなどの像、絵馬、船の飾りなどを展示資料としている。

祭礼については、祭事に使われる面などの道具を紹介するほか、映像や写真をダイジェストとして組み合わせ、指定文化財となっている六つの行事を映像で紹介することにした。祭事の一連の流れを展示で紹介することは難しいが、当館の展示では映像を利用することによって工夫した（写真 5）。

最後に歴史分野について紹介する。展示では歴史分野を相模国府の時代以降としたため、鎌倉時代以降の町内の歴史を紹介し、関連の資料を展示することに努めた。今回のリニューアルでは基本設計の段階では通史展示を主軸とすることになっていたが、施設改修も含めた展示替えを行うことが現実的ではなかったため、最終的には歴史分野もテーマ展示で紹介することになった。町内の歴史はそれぞれの時代に地域の特性を示すトピックがあるため、どのテーマを取り上げるのかを検討する必要があった。展示資料との兼ね合いも大きいが、歴史叙述を考えた際、やはり時代的な流れがないと来館者に町内の歴史を伝えることは難しいと考えたため、必ずしも資料が豊富ではないテーマも設定した。分野のテーマを「憧憬の地」としたが、これはいつの時代もこの地域が人々の憧れとなっていた、その背景には豊かな自然があったという意味を込めている。

中項目のテーマを逐一紹介していると紙幅を割いてしまうため、要点のみを詳述する。今回、歴史分野の展示で工夫した点は、展示と保存の観点、資料が存在しないテーマの展示、今後の展示替えへの配慮の三点である。他の博物館施設を訪れた際、いつも気になることが常設展示に供することによる資料保存の難しさである。特に、歴史分野の展示資料には古文書などの恒久的に展示することが好ましくない資料が多く含まれる。比較的、財政面や人材が充足している博物館施設では、複製を作成するなど、展示資料に配慮がなされていて、展示テーマにおいて紹介したい重要な資料が常に見学できるようになっている。一方で、財政面や人材を確保することが厳しい施設では、無配慮に古文書などの紙資料が長期間展示されている様子がうかがえる。残念ながら、当館もリニューアル前は後者に近い展示をしていたため、この点は何とかして改めたいと考えた。しかしながら、今回のリニューアル事業の予算では、複製品を作成する費用までは含まれていない。今回のリニューアルでできたことは、恒久的に展示することが難しい資料は写真パネルにすることと、展示替えがしやすい展示ケースや演示具を作成することであった。後者は冒頭に述べた工夫の三番目にあたる展示替えへの配慮にもつながる。

展示テーマの内、「大磯の寺と神社」、「東海道大磯宿」、「文学と大磯」、「ゆかりのある人々」では、特に木造の神像や、紙資料を展示することを想定していた。そのため、それぞれに展示替えの計画を立て、どのような資料を展示しても構わないような展示ケースにするなど、リニューアル工事から意識して業者と交渉した。「ゆかりのある人々」は、現在、伊藤博文、松本順、吉田茂を取り上げ、各人物に一つの特注の展示ケースを作成したが、伊藤博文の展示ケースのみ展示する資料を想定して展示ケースの幅を大きくした（写真 6）。また、「文学と大磯」の展示ケースは、展示台の高さを必要に応じて変えられるよう、展示台を組み合わせて高さを変えられるように工夫した（写真 7）。

テーマの中には実物資料（一次資料）が乏しくても、紹介しないと町内の歴史が語れないものが含まれている。「大磯の寺と神社」、「別荘文化」は苦慮したテーマであった。寺と神社については、町内の寺社が所有し

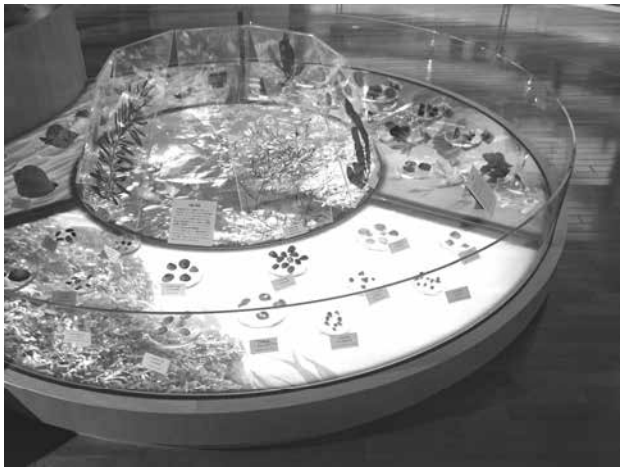

写真 4　貝と海藻標本の展示

写真 5　民俗分野の展示

ている仏像や神像の写真を、許可を得て写真パネルにして紹介することによって対応している。別荘については、大磯のトピックではありながらも、実物資料を展示することは不可能であるため、設計図や解体前に詳細な調査を行った別荘を2点取り上げて、模型にして紹介することにした（写真8）。限られた予算の中、この模型の製作には予算を割く必要があった。リニューアル前は、別荘の有り様を紹介することが難しい展示であったが、模型を展示することによってわずかながら別荘文化を強調することができたように思う。このように実物資料が乏しい場合は、どうしても複製資料（二次資料）を作成しなければならない。歴史分野は特に、複製資料の作成が求められる。限られた予算の中でどこまで複製を作成できるか、取捨選択を迫られた。

最後に、展示替えを考慮した展示の工夫である。この考え方には先述した保存の観点も含まれるが、今後の財政事情を鑑み、大規模な展示替え工事を実現させることは以後困難であることを強く意識した。おそらく、今後博物館活動を続けていけば、展示内容を更新したくなることもあるだろう。その時に大規模な工事をしないと展示替えができないとなれば、いつまでも展示内容を更新できなくなる。先述した展示ケースの工夫から始まり、実のところ当館の常設展示室は、解説パネルも全て掛け替えを行えば容易に変えることができるようになっている。今回のリニューアルでもこの点が大きな助けとなった。

3.　効果と課題

実施のために紆余曲折を経て、工事の予算だけを見れば約8,000万円という、展示リニューアルという事業としては低予算の中で行った当館の展示リニューアルは、お陰様でリニューアルオープン以降、リニューアル前よりよくなったと来館者からご意見をいただくことができている。大きな要因は何か。詳細なアンケートを取っているわけではないため実証的なことは述べられないが、筆者の受けている印象をまとめる。

今回のリニューアルにおいて来館者が受けた印象は、展示内容が変わった、明るくなっただろう。展示内容が変わったという印象は、大型展示資料を撤去したことが第一に大きい。リニューアル前の当館の展示と言えば、とにかく御船祭の舟山車の印象が強かった。この舟山車が常設展示室に展示されている限り、常設展示の印象は変わらなかったのだ。リニューアルで舟山車を撤去し、代わりにエントランスホールに展示していた城山荘の軸組模型と「ゆかりのある人々」の展示ケースを配置したことで、大きく印象を変えることができた。同様に竪穴住居の復元模型を撤去したことも、展示替えを印象付けることになった。リニューアルを印象付けるためには、まず大型の展示資料を変えることにある。

次に明るくなったという印象だが、照明をＬＥＤスポットライトに変えた効果だと言える。光源の変化もさることながら、リニューアル前のスポットライトはハロゲン電球を使用していたため、ややもすると一ヶ月で電球が切れてしまい、交換する必要があった。当館職員としては、極力電球の交換を行っていたが、開館前の30分間で交換することは時間との闘いでもあり、なおかつ行事などが重なっている繁忙期には対応しきれていないことがあった。来館者から展示室が暗いとの指摘を受けることはしばしばあった。その点、

写真6　「ゆかりのある人々」の展示ケース

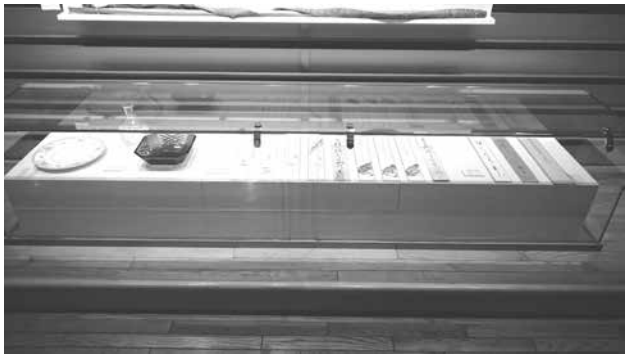

写真7　「文学と大磯」の展示ケース

写真8　展示している別荘模型の一つ

ＬＥＤ照明は交換が半永久的に不要であり、光源を保てている点が明るいという印象に大きな影響を与えている。また、キャプションの地色を白色にしたことも大きいだろう。リニューアル前のキャプションの地色はシルバーグレーであった。このキャプションの地色は、他の博物館施設を見ていると流行りがあるようで、近年、開館あるいはリニューアルを行った施設は、大抵地色を白色にしている。かつては地色を黒色にし、文字色を白色にすることが流行っていたようだ。オーソドックスに地色を白色、文字色を黒色にしたキャプションは読みやすく、また、明るい印象を与える。近年の流行は、この明るさを反映しているのだろう。

好評価の一方で、反対の意見をうかがうこともある。筆者が指摘を受けた意見の中には、常設展示が象徴的であるという意見があった。今回のリニューアルの展示では、極力解説文を少なくし、テーマごとの解説を、大項目、中項目とそれぞれ一つのパネルに集約している。結果的に、解説文の文字数は限られ、説明し足りないことがしばしばあった。もちろん、解説文が長いことは来館者にストレスを与えるため、必ずしもよいことではない。しかし、解説文を短くするのなら、図表を工夫するなど他の方法がある。今回のリニューアルではこの配慮がほとんどなかった。

むしろ、考え方としてはテーマに関連した資料を象徴的に配置することによって、来館者に対して資料の造形としての印象を与えることに主眼が置かれていたように思う。この考え方は基本設計の段階で強く描かれており、実施設計の検討から加わった筆者にとっては、本音を言うとかなりの違和感を持った。筆者自身が歴史分野を担当していることもあると思うが、地域博物館の展示を考えたとき、資料を単純に配置しただけでは、来館者には展示の意図が伝わりにくいだろう。前項で述べたとおり、歴史展示はある程度の叙述があって成り立つものであり、資料のみで展示することは難しい。来館者にも象徴的だという印象を与えているとおり、地域の事柄を伝える上で、通史的配慮のある展示を行いたかったと反省している。

ここからは、実際に筆者が展示リニューアル事業に携わってみて感じた課題をまとめる。正直に言って、筆者自身は今回の事業については反省することばかりが思いつく。その大きな要因に、事業の進め方における課題があるため、ここではその点を詳述する。

当館のリニューアルが難航した大きな要因の一つとして、基本設計が策定された後、事業が三年間凍結したことがある。平成22年度内に基本構想と基本設計が順調にまとめられ、この二つの計画には関連性が保たれていた。しかし、たかが3年のことではあったが、事業が凍結した間に、職員の異動があり、基本設計の当初の意図をそのまま実施設計に反映することは非常に困難な状況に陥った。平成25年度に、予算的措置がないまま基本設計の内容を実施設計に結び付ける検討を館職員で行った。その際は、基本設計の展示イメージを具体化する作業で、大変な困難を感じた記憶がある。当時の館職員でどのような展示にするのか案を出し合ったが、基本設計のイメージが具体性に乏しく、結局分野ごとのゾーニングを検討するだけで1年が経過した。

今振り返ると、この時に少なくとも各分野で展示する資料の一覧を作成する必要があっただろう。平成26年5月に、実施設計委託業務の契約を締結し、委託業者と具体的な打ち合わせが始まった。ようやくこの実施設計の検討段階において、具体的な展示資料の選定が始まった。しかし、この作業が労力を要した。委託業者とのやり取りの中で、具体的な展示資料を示す場合、資料名はともかく、写真画像、寸法が必須の情報となる。大変残念なことに、当館では収蔵資料の把握を、資料の受入台帳によって行っているが、この受入台帳には受入番号、受入年月日、資料名、数量、受入方法程度の情報しか登録しておらず、写真画像の作成や採寸を一から行う必要があった。資料整理にはある程度の時間が必要であるため、寄贈などの受け入れがあった場合、なるべく早く書類上のやり取りを済ませる関係から、受入台帳には簡易な情報しか登録していない。そして、さらに詳細な整理、調査となると、まとめて時間を割いて行わなければならない現実から、整理、調査が後手に回っていた。他分野はともかく、歴史担当の学芸員が配置されて4年目の状況で、歴史分野には本来存在する筈の開館以来26年の蓄積は存在していなかった。もちろん、これは筆者の力不足によるものではあるが、資料を受け入れた段階で、きちんとした資料整理が行われていれば、資料選定の作業を比較的にスムーズにできたことは間違いない。

理想から言うと、展示資料の選定は、やはり基本設計の段階からなされているべきであった。近年、博物館の展示手法として、学問分野をまたぐ展示が見られるが、当館も人文系と自然科学系の両分野を扱っている強みを活かして、学問分野を横断した展示を行うことは十分にできた筈である。リニューアル後の展示を見ると、わずかながら自然分野と考古分野の展示が平行していたり、歴史分野の展示の中に、発掘の成果として近代の煉瓦の展示があったりするが、学問分野を横断した成果を発表する場とはならなかった。展示資料の一覧を早い段階から作成し、各分野の担当者が横断的に検討することができれば、より学問分野が融合した展示もできただろう。

そして、翌平成27年9月から展示工事着手となり、現場工事は平成28年3月から開始し、同月22日から11月2日を休館にしてリニューアル工事を行った。工事中も工事委託業者、工事監理委託業者と定期的な打ち合わせを行い、事業を進めていったが、実施設計段

階で綿密に検討できていなかったことも多く、工事中に様々な要因で変更を行うことがあった。変更を行うことによる事務作業も増え、最終的には契約金額の中で工事内容を調整することになった。博物館の展示工事は、実施してみて判明することや、調査研究の進捗によって変更せざるを得ないことが発生することはあるだろうが、それにしても計画が甘かった点は否めない。

当館の展示リニューアルは、なかなか実現しなかったところを、旧吉田茂邸の再建という機運に乗じて俄かに実現した背景がある。実現性の見通しが立たなかった点から、館職員相互の意見調整がなかなか進まなかった現状もあるが、見通しが立っていなかったとしても、実現に向けて館職員で綿密な打ち合わせができていれば、より計画的に事業を進められただろう。

おわりに

少子高齢化を迎え、今後どこの自治体においても財政難が見込まれる中、自治体直営の博物館施設が常設展示のリニューアルを行うことは、益々難しくなるだろう。しかしながら、多くの博物館施設がバブル期に建設され、今後老朽化に伴うリニューアルの検討が予想される中、リニューアルの機運はあると考えられる。30 年前の展示手法が古いこともあるだろう。学芸員として博物館施設に勤めているのであれば、展示リニューアルの希望を抱かないことはない。大事なことはいつ訪れるかわからない機運に備えて、常にリニューアルを意識した調査研究活動を行い、実現の可能性が見えてきたときには、予算を限りなく抑えた中で今後の維持管理を考慮した展示を提案していくことが、小規模博物館の学芸員に求められることなのではないだろうか。実際に、小規模博物館の展示リニューアル事業の末端に携わり、強い反省と共に筆者が感じたことである。本稿が、常設展示のリニューアルを検討している他の博物館施設の参考になれば幸いである。

本稿は、『民具マンスリー』第 50 巻 11 号（2018 年 2 月）掲載稿を転載したものである。